

制度的状況の会話分析に基づく マスメディア相互行為の考察

陳 力
趙 剛

1. はじめに

現在、日本においては制度的談話をめぐって応用会話分析が盛んに行われている。制度的談話とは「特定の制度的規範への志向によって特徴づけられる談話ないしトークを指す(櫻村,2003:321)」ものであるが、裁判、教室、医療、マスメディアなどを構成するトーク等がとくに研究されている。その中でとりわけ数多く取り上げられているのは、医師患者間の会話分析である。それに対して、マスメディアという制度的場面で行われたマスメディア・トークについての研究はあまりなされていない。

マスメディアは社会において報道機能を発揮し、マスメディア・トークをニュースの内容を見聞きする者に対して提示する。したがって、トーク自体を相互行為としての社会的ないし言語的現象として研究することが重要である。社会学と言語学の特徴を兼ねた会話分析によって、マスメディアの相互行為を分析することで、そこに現れる制度的特徴が究明できると考えられる。

本稿では、マスメディアの相互行為を取り上げ、制度的状況の会話分析の視点に基づいて、マスメディアの相互行為における会話ストラテジーを考察し、さらに、「社会的なエピステモロジーと社会諸関係」を検討し、マスメディアに現れる制度的特徴を究明することを目的とする。

2. 先行研究と問題提起

2.1 先行研究

Drew&Heritage(1992)によれば、制度的相互行為とは場面で決定されるものではない。参加者の制度上のアイデンティティが、参加者の従事する活動に何らかの形で関連付けられる際に相互行為は制度的になる¹。そこで、相互行為の「制度的」とは、外在的な条件や環境によって「前もって」、「一律に」決められている属性などではなく、常に、当該の相互行為に参加する人々が具体的な会話的やりとりなどの詳細な作業を通して作り上げるプラクティスなのである。そして、このプラクティスを通して、当該状況への参加者は自分たちが「ある制度をいま、生きていること」を経験的に表示しつつ相互作用を実践しているのだ(好井,1999:37-38)。

江口(2000)によると、制度的場面における相互行為の研究の主要傾向として、次の二点が挙げられる。第一に、言語使用におけるコンテキストの重要性に取り組もうとする社会言語学的な言語へのアプローチが進展したこと、そして第二に、言語の本質は行為であると認め、社会的な行為と相互行為の特徴をダイナミックに取り扱う枠組みが現れたことである。

Drew&Heritage(1992)は制度的会話における次の五つの次元に注目し、研究を行った。すなわち、1)語彙の選択、2)順番のデザイン、3)シーケンスの組織化、4)全般的な構造的組織化、5)社会的なエピステモロジーと社会的諸関係、である²。Drew&Heritage (1992) のアプローチは、制度的状況の会話分析の理論基盤と研究方法を構築した最初の先行研究として位置づけられる。しかしながら、これらの五つの次元を仔細に検討してみると、五つの次元それぞれが同じレベルになっていないことが明らかである。その 1)の

¹ ...the institutionality of an interaction is not determined by its setting. Rather, interaction is institutional insofar as participants' institutional identities are somehow made relevant to the work activities in which they are engaged. (Drew&Heritage,1992:4)

² 社会的なエピステモロジーと社会的諸関係(social epistemology and social relations)は、専門家の職業的敏感性(Professional Cautiousness in Interaction)と交際の非対称性(Interactional Asymmetries in Institutional Settings)の二つの面で現れている(Drew&Heritage, 1992 : 45-47)。

「語彙の選択」は語彙論のレベルに属し、2)から 4)は会話構造のレベルで、5)は社会学の範疇に偏っている。したがって、制度的状況の会話分析に基づく本稿では、その 1)を議論の対象から除外する。

マスメディア・トークは制度的談話の一種であり、「マスメディア制度を構成する談話ないしトーク」(樫村,2003:322)を指す。マスメディアの相互行為と見なすマスメディア・トークについての論考には、好井(1999)、樫村(1999)などがある。マスメディアの報道やニュース・インタビューには、「定式化(formulating)」、ニュース「らしさ」及び「中立性(neutrality)」という制度的特徴が表れていると結論づけている。

串田・好井(2010)はインタビュー・トークの開始、生成、「中立性」に関して、次の三つの特徴を挙げている。1)ヘッドラインでニュースのトピックが告知され、次に、より詳細なバックグラウンドの情報が提示され、IR がインタビューへの導入部に移る³。2)インタビューは Q-A の連鎖から成る。固有の特徴を有する順序で、交替の形で構成されていく⁴。IE の陳述や立場性・意見に対して、IR は「中立主義的」スタンスを維持するという強い規範に従うことになる⁵。3)インタビューという相互行為のなかで IR と IE が微細に対抗しせめぎ合う。そうしたせめぎ合う実践を通して「ニュース」という情報が提示されているのである。

2.2 問題提起

制度的状況の会話分析は具体的な会話のやりとりを分析の焦点とすべきであるが、Drew&Heritage(1992)による五つの次元はその分析装置としてはふさわしくない。特に、その 1)の「語彙の選択」は会話分析の研究対象ではなく、本稿の考察対象とはならない。2)~4)の項目とも会話の構造に偏っており、会話ストラテジーに触れていないため、分析の項目としては不備な点がある。また、その五つの次元は同じレベルのものではないという問題があると考えられる。

さらに、マスメディア・トークに関する先行研究では、その定義や特徴を

³ 「IR」は interviewer の省略で、インタビューする者と指す。

⁴ 「Q-A」は Question-Answer の省略である。

⁵ 「IE」は interviewee の省略で、インタビューを受ける者と指す。

論じているが、実例分析が欠けている。しかも、マスメディア・トークの特徴として、中立性が挙げられてばかりいる。それ以外のほかの特徴もいくつかあるはずであるが、実際にはあまり言及されていない。なお、資料のジャンルから見れば、先行研究の多くはニュース・インタビューを中心として分析しているが、マスメディアの相互行為としてのマスメディア・トークというのは、ニュース・インタビューのみを指すのではなく、対談、座談会などのジャンルもマスメディア・トークであるため、これらも研究対象とすべきである。しかも、多くのニュース・インタビューについての先行研究は IR の考察に限られているが、同じく会話参加者としての IE についての研究はあまりなされていない。

それゆえ、方法論と多様性の面からみると、制度的状況の会話分析に基づくマスメディア・トークに関わる研究はまだ不足していると言えよう。

本稿では、先行研究の不足を補うべく、まず制度的状況の会話分析の視点から、マスメディアの相互行為における会話ストラテジーを考察し、また、マスメディアにおける「社会的なエピステモロジーと社会諸関係」を分析し、さらに、マスメディアに現れる制度性と制度的特徴の検討を試みる。

3. 資料収集と研究方法

3.1 資料収集

本稿の分析の対象となるものは、『週刊朝日』の「マリコのゲストコレクション」及び『世界』に掲載されたインタビュー、対談、座談会である。本稿で用いた資料の会話参加者は、ある組織・制度を代表する機関の首脳・政府の行政官・会社の幹部、メディアの記者などである。

なお、資料の性質についてであるが、『週刊朝日』はインタビューという IR と IE 二人からなる相互行為であるのに対して、『世界』は対談、座談会という多人数の相互行為である。

3.2 研究方法

先行研究の分析方法を参考に、本稿では下記の方法で分析を行う。

(1) 会話ストラテジーの分析

マスメディアの相互行為における会話ストラテジーを分類し、それぞれ定

義をつけ、今まで研究されていない会話ストラテジーも提示する。さらに、各会話ストラテジーの役割を分析する。

(2)社会的なエピステモロジーと社会諸関係の検討

「社会的なエピステモロジーと社会諸関係」は、「専門家の職業敏感性」及び「コミュニケーションの非対称性」という二つの面に現れている (Drew&Heritage, 1992:45-47)。本稿では、この二つの面に注目し、マスメディアの相互行為にそれらがどのように現れるかを考察する。

(3)制度性と制度的特徴の検討

(1)と(2)の考察により、マスメディアの相互行為に潜むマスメディアの制度性は何か、またどんなマスメディアの制度的特徴が現れるかを明らかにする。

4. マスメディアの相互行為における会話ストラテジー

本稿では、話題に関わる会話ストラテジーを焦点に当てて考察する。

4.1 補充解釈型

マスメディア・トークにおいて、社会機関を代表している IE が専門的な術語を駆使することがよくある。専門的な術語は、一般の視聴者・読者は知らない可能性が高い。この場合、IR は話題に関する背景を補充し、それを明確に説明するわけである。

(1)インタビュー

IE: 僕がリクルートを辞めてからもう 20 年ですよ。彼らは自ら育っていったんです。「社員皆経営者主義」というモットーを掲げて、会社の中にプロフィットセンターという小さな会社をつくったので、人が育ったんでしょう。

IR: リクルートという言葉、私たちは江副さんがつくった会社名で初めて知ったけど、それがいつの間にか日本語として定着して、リクルートスーツ、リクルートカット、リクルートバッグ、リクルート整……。

IE: リクルート整形? 初耳。(笑)

IR: リクルートってそもそも江副さんが、東大新聞の広告取りを学生バイトで始めたことから始まって……。 (略)

(林真理子×江副浩正『週刊朝日』2007.6.15)(下線は筆者)

(1)の「リクルート」という専門用語は IE が初めて話した言葉で、視聴者・読者にとっては、一瞬、ピンと来ない可能性が高い。それで、IR が続いて「リクルート」に関する背景知識を補充して視聴者・読者に解釈し、対談の受容性を確保する。しかも、リクルートから派生したいくつかの言葉も含めて紹介することを通し、興味性も喚起する。

4.2 注釈説明型

IE の話を別の言葉に置き換えて、それを視聴者・読者によりわかりやすく説明する会話ストラテジーである。「～逆に言えば」「別の言い方をすれば」「おっしゃったお話を言い換えると」などがよく使用される。

(2)対談「TPP は社会共通資本を破壊する」

IE：MAI の原型は、アメリカ、メキシコ、カナダの三カ国が結んだ北米自由貿易協定（NAFTA）です。（中略）この時は、メキシコから農業を失った農民たちが大量に不法移民として殺到すると予測して、アメリカは軍隊を国境に配備するというおぞましいことまでやった。

IR：今のお話を私なりにパラフレーズしてお話します。私は「社会的共通資本」という概念をコアとして、約 50 年、経済学の再構築に全力を尽くしてきました。（略）

(宇沢弘文×内橋克人『世界』2011.04)

(2)のように、「今のお話を私なりにパラフレーズしてお話します」というメタ言語が用いられ、IR が前述した内容を言い換えて、後の説明を引き出す。IE の話を「社会的共通資本」の概念で説明し、オーディエンスにわかりやすく説明している。

4.3 話題総括型

ある問題について聞かれたとき、IE の感情変化や言葉の制限のため、自分の意思を明確に伝えられなくなることがある。そのとき、IR は IE の話に基づき、短い言葉で IE の発話を総括し、視聴者・読者に簡潔に要点を説明する。よく使われる表現は「ということは」、「一言で説明すると」、「以上話してきたことをまとめますと」などである。このような会話ストラテジーが話題総括と呼ばれる。

(3)インタビュー

IE：うちの両親は「勉強しろ」と言わなかったですね。「子供はたっぷり寝て、元気に遊んで、健康であればいい」という、これだけ。それを真に受けたの、僕は。(笑)

IR：子供の潜在能力を信じてたんでしょうね。体力さえつけておけば、やる時にはやるだろうと言う。

IE：だと思います。(後略)

(林真理子×中田宏『週刊朝日』2006.6.9)

(3)では、IE の教育についての質問に対して、IR の回答は、「うちの両親は『勉強しろ』」と言わず、「子供はたっぷり寝て、元気に遊んで、健康であればいい」という表面なものだけで、伝えたい内容は明確に明示していない。一方、IR は自分の言葉で「子供の潜在能力を信じてたんでしょうね。体力さえつけておけば やるときにはやるだろうと言う」と総括し、IE に協力して、IE の意思を明らかにして、視聴者・読者に伝達している。IE も「だと思います」と、IR の総括を認め、情報の「真実性」を確保している。

4.4 話題回避型

ある敏感な質問や答えにくい質問が出されて、IE が自分の立場やメンツを守るため、その話題を避けようとする戦略は「話題回避」と呼ばれる。ストレートに質問に答えず、または答えにくいふりをして、不足した情報を提供することで、自分が明確に判断できないこと、自分に不利なことを隠そうとする会話戦略である。「ノーコメント」「難しい質問ですね」などの表現がよく使用される。

(4)インタビュー

IR：先生の予想だと、患者さんに協力してもらって臨床試験ができるのはいつぐらいなんですか。

IE：非常に難しい質問ですね。

IR：スイマセン。(笑)

IE：安全性の問題がありましてね。まだちょっと予測できないんです。(略)

(林真理子×山中伸弥『週刊朝日』2008.8.8)

(4)では、iPS 細胞を研究している医学者の IR が、IE から具体的な臨床試

験の実施日について聞かれ、「非常に難しい質問ですね」と答え、直接その質問に答えるのを避けている。そのあと、答えにくい理由も述べているが、そこに、医学者としての慎重な態度が表れているのだ。「話題回避」の会話ストラテジーが使用されることで、情報の「客観性」、「真実性」が守られている。

4.5 話題評価型

「話題評価」とは先行話題を評価する会話ストラテジーである。IRがよく「いいお話ですね」、「いい情報聞いちゃった」などと言う。それは視聴者・読者に対して「いま言われていることがニュースなのです。これから、さらにIEが何を語るか、注目する必要がありますよ」というマークを与え、視聴者・読者にどのようにトークを聞けばいいのかという枠組みを与える機能を果たす。

(5)インタビュー

IR：前にお目にかかったとき、会長と私は「生家が本屋」という共通点があって、話が盛り上がりましたよね。売り物の本をきれいに読んで、また返しておくのが得意だったんですけど、私と同じだなと思って笑っちゃいましたよ。

IE：汚さないようにそっと読んでまたそっと返す（笑）。最近、ガチャガチャに線を引っ張ったりしてるけど。

IR：会長は素晴らしいことをおっしゃっていて、「偉くなりたいとか、頭がよくなるからと言って本を読むのをやめなさい。心がほしがるまま、水を与えるように本を読まなければいけない」というのは、まさにそのとおりですね。

（林真理子×新浪剛史『週刊朝日』2009.5.29）

(5)では、IEは読書についていろいろな話をしている。IRが「素晴らしいことをおっしゃっていて」というほめ言葉でIEによる話題を評価した。ここで、「話題評価」という会話ストラテジーを用い、視聴者・読者にニュースマークを提示している。

4.6 話題負担緩和型

話し手が相手のメンツに関わる話題、あるいは相手の反感を引き起こしうる話題を提示する場合、人間関係を緩和し、相手の心理的負担を軽減するた

め、話題負担緩和という会話ストラテジーが用いられる。

相手のメンツを傷つける恐れのある話題に言及する前に、ことわりの言葉を使用する。例えば、「立ち入ったことで失礼ですけど」、「言っては悪いですけども」、「ちょっと言葉が悪いですけど」などがある。それにより、フェイス威嚇行動の程度を弱め、談話を円滑に進めることができる。

マスメディアの相互行為において、ある話題に対する IE の反感を消すため、IR が前もってその話題を実際以上に価値がないと述べる。それにより、話題を軽くし、人間関係を調和させる役割を果たす。「下世話な質問ですけど」、「余計なお世話でしょうけど」などの表現が多用される。

(6)インタビュー

IR: 下世話な質問ですけど、この『カラマーゾフの兄弟』、印税計算ですか。

IE: 僕、今まで翻訳でどんなにエネルギーを費やしても、お金をいただいたこと、ほとんどないんですけど、今回は印税でいただきました。

(林真理子×亀山郁夫『週刊朝日』2007.11.30)

(6)では、印税計算の話題がプライバシーに関わるものであるため、IE の反感を買う可能性が高い。IR が IE の抵抗感を多少消すため、本題に入る前に、話題負担緩和の会話ストラテジーを用い、IE から心理的な準備を求めている。

5. 社会的なエピステモロジーと社会諸関係

マスメディアの相互行為はあくまでも特定の社会行為である。制度的状況の会話分析のアプローチは、言語学のみならず、社会学の視点からも制度的談話を考察すべきである。それに、Drew&Heritage(1992)は、「社会的なエピステモロジーと社会的諸関係」は制度的談話の研究項目の一つだと指摘している。

「社会的なエピステモロジー」とは、知識や情報の社会的側面を研究する学問である⁶。制度的状況の会話分析における「社会的なエピステモロジー」

⁶ Social epistemology is the study of the social dimensions of knowledge or information.

<http://plato.stanford.edu/entries/epistemology-social/> から引用する。

は、制度的談話の参加者がいかにその相互行為を通して、彼ら自身と自らの知識との関係を表わすかを研究する学問である。ニュース・インタビューに関する先行研究によると、IR はいつも中立的な立場で、流されるニュースと一定の距離を保つ傾向が見られる。「社会的諸関係」としては、制度的談話に存在する非対等関係が挙げられる。具体的に言えば、参加者双方の制度の仕組み、及び規則についての理解の非対等、会話参加の権利上の非対等、知識所有上の非対等などがある。

本稿では、Drew&Heritage(1992)をもとにして、「専門家の職業敏感性」及び「コミュニケーションの非対称性」という二つの面から、マスメディアの相互行為に見られる社会的なエピステモロジーと社会諸関係を分析する。

5.1 専門家の職業敏感性

「専門家の職業敏感性」とは主に、公共機関の専門家が情報を伝えるとき、非常に細心で慎重であり、それによりできるだけ個人の責任を回避していることを指す⁷。

マスメディアの相互行為では、IR の質問に対し、IE の応答すべきアジェンダが設定されるが、中立性と独立性を守るため、消極的対応、挑戦的対応がなされる傾向が見られる。

5.1.1 消極的対応

特定の質問に対し、専門家が所属する組織の立場で直接回答せずに、ごまかしたり回避したりして消極的に答える現象がよく見られる。

(7)対談「国会事故調は何を明らかにしたか」

熊谷：(前略)この上で、こうした調査の際に個人の責任についてどこまで究明するかは別の問題としてあるかと思いますが、いかがでしょうか。

田中：私の調査の範囲内では、まず、運転員に事故の責任を押し付けることはできないと思います。政府事故調の中間報告では運転員の対応を問題視する文言がありますが、どうかと思います。訓練不足などはあったかもしれないものの、事故対応のための訓練もそのための設備もな

⁷ …the professional participants in institutional interactions design their work so as to maintain a cautiousness, or even a position of neutrality with respect to their co-participants.(Drew& Heritage, 1992:47)

く「その日」を迎えてしまったのですから、責任を特定の個人に帰することは適当ではないでしょう。事故は起きないことを前提として、必要な設備や訓練などの整備を長年にわたって怠ってきた経営陣や監督官庁に責任はあるといえます。

崎山：責任の特定はかなり難しい問題です。放射線被爆をめぐるのは、顕著な問題として「学校の二〇ミリシーベルト問題」があります。……専門家の責任は重いと思います。

(熊谷伸一郎×崎山比早子×田中三彦 『世界』2012.9)

(7)は原発事故による被爆被害に対し、国会事故調(国会東京電力福島原子力発電所事故調査委員会)の専門家がその責任の所在を究明しようとする発言である。IRの質問に対して、科学ジャーナリストである田中は、答える前に、まず「私の調査の範囲内では」と言っておいた。それは「これから述べることはすべて私の調査した範囲内のもので、範囲外のものはこちらで述べていない」ということを意味し、その上で、政府事故調の中間報道に対立する意見を出したのである。それは、専門家として、非常に厳密かつ慎重な発言だと考えられる。

なお もう一人のIEの崎山は元放射線医学総合研究所主任研究官であり、後から見ると、崎山は「専門家の責任は重い」という意見を提示しているが、最初は「責任の特定はかなり難しい問題」と述べている。一見消極的かつ回避的な応答であるが、「専門家の職業敏感性」を鮮明に表わしている。

5.1.2 挑戦的対応

IRの質問に対して、IEが「ノーコメント」といった後ほかに何も言わないとは限らず、時々挑戦的な発話で答える場合がある。一方、IRのほうも、中立性を保ちながら、マスメディアの立場からの対応姿勢も見られる。

(8)インタビュー

IR：テレビで、講演会でお話になると違ってすぐ言葉尻をとらえて言う人がいるから大変でしょう？慎重にならざるを得ないですよ。

IE：きょうのお昼の講演も、テレビが全部撮ってましたから、一部の新聞、テレビ局はそこから言葉尻を引っ張り出すんでしょう、きっと。

IR：朝日はそんなことしない……するか。(笑い)

IE: テレビがいちばんひどいね。

(林真理子×中川昭一『週刊朝日』2006.12.1)

(8)では、まず、「言葉尻をとらえて言う人がいるから大変でしょう？」という質問に対し、自民党政調会長である IE は簡単に「イエス」か「ノー」というように答えるのではなく、そのかわりに、「一部の新聞、テレビ局はそこから言葉尻を引っ張り出すでしょう、きっと」と答える。それは自分が大変な立場になったのは実に新聞、テレビ局の報道によるものだと暗示している。IR はマスコミの立場に立つため、「朝日はそんなことしない……するか」と述べたが、その後、IE はすぐに「テレビがいちばんひどいね」と攻撃性のある発言をしている。

5.2 コミュニケーションの非対称性

「コミュニケーションの非対称性」とは、制度的談話では、参加者は、社会的権力、制度的専門知識、情報（特に機関内部の情報）において、対称性がないということを指す⁸。

通常、日常会話は平等的対称的な相互行為であると思われる。それに対し、制度的談話は非対称的である。それは、制度的談話の参加者がそれぞれコミュニケーションの次のような役割を演じているからだ。会話参加者は特定の社会機構を代表して、コミュニケーションの中で、おのずと違う地位を与えられ、それに対応する発話行為の権利と義務を有する。また、制度的談話の非対称性は、専門家が専門知識を把握していることにも表れている。というのは、専門家は普通の視聴者・読者の知らない専門知識を把握しているため、コミュニケーションにおいて、主導的な立場に立つわけである。それゆえ、コミュニケーションが非対称になるのである⁹。

5.2.1 発話権利上の非対称性

マスメディアの相互行為を参加者の構成から見れば、マスメディアを代表している IR と、ある組織や制度を代表している IE によって相互行為が成り立つ。IR と IE はマスメディアのその場にふさわしい規範や価値に従って行

⁸ 刘运同(2007:87)《会话分析概要》を参照。

⁹ 于国栋(2008:261)《会话分析》を参照。

為すべきである。マスメディアという制度を守るため、マスメディアを代表している IR の指示に従ってコミュニケーションを行うことが期待されている。

談話の進行については、基本的に IR が主導し、IE が協力して発話する。例えば、話題の選択・転換やトークの開始と終結などは、ほとんど IR によって決められる。つまり、マスメディアの相互行為で、IR が比較的、支配側に位置づけられる。IE のほうは、支配される立場の役割となる。このことから、マスメディアの相互行為において発話権利上の非対称性が存在することが検証できる。

5.2.2 専門知識上の非対称性

マスメディアの相互行為における IE は特定の領域の専門家である場合が多い。専門知識に関わるニュースを伝える時、コミュニケーションが非対称的になるわけである。

IR は前もってその専門知識について調べておけば理解できるが、多くの視聴者・読者は、そうした専門知識は理解できない可能性が高い。それで、専門家あるいは IR はオーディエンスに積極的に説明を与えることによって情報を伝える。

(9)インタビュー「日本の核開発（下）」

佐々木：一九五四年三月、マーシャル諸島のビキニ環礁でマグロ延縄漁船「第五福竜丸」の乗組員が被災。アメリカの水素爆弾（水爆）実験「ブラボー」による被爆でした。

山 崎：「ブラボー」は、「ニュールック戦略」が目指す小型の核爆弾を開発するための水爆実験だったんですよ。日本では、第五福竜丸の被害が明らかになると、「広島、長崎に次ぐ三度目の被害」という非難の声があがりました。

（佐々木実×山崎正勝 『世界』2012.7）

(9)では、IE の山崎は東京工業大学大学院理工学研究科物理学専攻の博士であり、核問題については正真正銘の専門家だと言える。IR の佐々木による発話で「ブラボー」が言及されるが、続くのは山崎が出したその説明である。IR も IE も「ブラボー」の意味が分かっているが、IE がここで説明す

る理由は、素人の視聴者・読者にとって、「ブラボー」は人口に膾炙しない専門用語のためである。もし説明しないと、視聴者・読者に誤解される恐れがある。したがって、専門家の説明により、このトークはIRとIEとの談話の外にいる視聴者・読者に向けたものであるとも考えられる。このような視聴者・読者に向けた談話の産出はマスメディアによる相互行為の特徴の一つだと言えよう。

6. マスメディアの相互行為に表れる制度性と制度的特徴

マスメディアという制度は、社会においてニュースを伝え、報道機能を発揮するための重要な役割を担っている。マスメディアという制度的状況で行われる相互行為には、それなりの特定の制度性と制度的特徴が備わっている。

6.1 マスメディアの相互行為に表れる制度性

以上の考察により、マスメディアの相互行為に表れる制度性には、主に「志向性」、「中立性」、「客観性」、「真実性」、「受容性」、「知識性」、「興味性」などがあることが明らかになった。

まず、Drew & Heritage(1992)によると、「制度的会話には当該の制度において設定された仕事や役目に対する志向性がある」マスメディアという制度において設定されている基本的な役割は、大衆にニュースを伝え、社会において報道機能を発揮することである。また、Edmund Husserlによれば、人間の意識はいつもある特定の対象に向かって、そしてそれを目標とする。意識のあらゆる活動の中で、その目的性とオリエンテーションが志向性となる。マスメディアの相互行為の場合では、視聴者・読者にニュースを伝える役割が前提であり、参加者であるIRとIEが互いに協力して、情報を視聴者・読者へ向かって流す。

また、Bill & Tom(2011)によると、「中立性」、「客観性」、「真実性」、「受容性」、「知識性」、「興味性」がマスメディアという制度の必要条件である¹⁰。前述したように、マスメディアの相互行為においては、マスメディアを代表

¹⁰ Bill Kovach & Tom Rosenstiel. The Element of Journalism[M]: Peking University Press, 2011

している IR がいつも中立的な立場に立ち、流されたニュースと一定の距離を保つ。IE の応答に対して、何らかの評価を伴った確認や継続促進という談話標識では反応しないが、それは報道に期待されている「中立性」を確保するためである。なお、マスメディアによって伝えられるニュースそのものは「客観性」、「真実性」、「受容性」、「知識性」、「興味性」を備えている。「客観性」、「真実性」のあるニュースこそが大衆に事件の真相を見せる一方で、「受容性」、「知識性」、「興味性」のあるニュースこそが視聴者・読者にとって受け入れられやすいものである。

要するに、マスメディアの相互行為の参加者 IR かつ IE ともに、マスメディアという制度の必要条件に制限されている。それに制限された状態で、参加者は互いに協力し合って確実なニュースを視聴者・読者に伝えようとするが、こうした意識はマスメディアの相互行為の参加者が持つ志向性である。

6.2 マスメディアの相互行為に表われる制度的特徴

以上の考察により、マスメディアの相互行為に現れる制度的特徴は下記のようにまとめられる。

(1) マスメディアの相互行為は目的性が明確である。マスメディアの相互行為は視聴者・読者にニュースを伝えるための談話で、談話が始まる前に、そこで話し合うトピックや会話の順番などがすでに決められている。つまり、どのような情報をどのような形で伝えていくのかは前もってマスメディアに決められているのである。談話をそのシナリオ通りに進めさせていけば、談話の目的は達成できる。

(2) マスメディアの相互行為の参加者に明確なオリエンテーションが分け与えられる。マスメディアの相互行為では、IR には質問し、会話のプロセスをコントロールするというオリエンテーションが与えられるのに対して、IE には回答し、会話の流れに沿って談話を完結させるオリエンテーションが与えられている。

(3) マスメディアの相互行為において、参加者の知識、情報の面で非対称が存在する。談話の IE は特定の制度や組織を代表し、より多くの専門知識や情報を把握している。その特定の情報を中心にトピックを立てる場合、その IE は自然と談話のプロセスで優位を占める。なお、トーク番組の主催者

の立場に立つ IR は、IE からの専門知識や情報をトークの形で、視聴者・読者の注意をそこに向けさせるという役目を果たすことが期待されている。

(4) マスメディアの相互行為は、視聴者・読者に向けた談話を産出する特徴がある。マスメディアの相互行為の中で、IE からの専門知識や新たな情報に対し、IR は「話題総括」や「話題評価」などの会話ストラテジーを使用し、視聴者・読者にニュースを提示するだけではなく、それをより容易に理解させるため、専門知識の説明、情報の強調をしようとする。また、限られた時間で、視聴者・読者に最も価値のある情報を伝える談話を産出するため、IR が積極的に話題を調整し、談話の流れをコントロールする現象がよく見られる。IE も IR のコントロールに従い、協力的に視聴者・読者向けの談話を産出することに貢献している。

(2) マスメディアの相互行為は日常会話と異なる特徴を有する。考察した結果、マスメディアの相互行為には、日常会話と異なる特徴として、主に下記のようなものが挙げられる。1) 順序はあらかじめ決められている。2) IR が語る内容はあらかじめ決められている。3) 会話参加者の役割関係は変わらない。4) IR 一方が会話の流れをコントロールする。5) 挿入連鎖、副次連鎖、修復連鎖、先行連鎖は見られないが、連鎖の構造は「質問—回答—質問—回答」という隣接応答ペアの連結のみによって成り立っている。

7. おわりに

以上の分析から、次のように結論づけられる。

- (1) マスメディアの相互行為は、制度的状況の談話の一つであり、会話参加者は視聴者に向けて談話を産出するための作業に貢献する特徴があることが証明された。
- (2) 視聴者・読者に向けた談話を産出するため、IR は「話題総括」「話題評価」などの会話ストラテジーを多用する。自分の立場やメンツを守るため、IE は「話題回避」というストラテジーを使用する。相手のメンツに配慮するため、IR は「話題負担緩和」という会話ストラテジーを使用する。
- (3) マスメディアの相互行為には、「専門家の敏感性」、「コミュニケーションの非対称性」といった社会的なエピステモロジーと社会諸関係が表れてい

る。

(4) マスメディアの相互行為の制度的特徴としては、目的性が明確であること、参加者に明確な役割が分け与えられていること、参加者の知識、情報の面で非対称が存在すること、日常会話と異なる特徴があることが挙げられる。

(5) マスメディアの相互行為の会話ストラテジーに、「志向性」、「中立性」、「客観性」、「真実性」、「受容性」、「知識性」、「興味性」などのマスメディアの制度性が潜在していることが認められた。

今後の課題としては、ここで扱った問題についての論述をより正確にすること、多様な資料の分析によって結論の妥当性を検証することが挙げられる。その他にも、語用論の視点から見たマスメディアの相互行為の制約と推論という課題が残されている。

参考文献

- [1] 秋葉昌樹.保健室のエスノメソドロジー.会話分析への招待(好井裕明・山田富秋・西阪仰編)[M].京都:世界思想社,1999.
- [2] 池田佳子.マスメディアと会話分析[J].言語文化研究叢書(8),2009:1-15
- [3] 江口英子.制度的場面における相互行為の会話分析概観[J].言語文化学会論集(14),2000:169-185.
- [4] 檜村志郎.会話分析の課題と方法[J].実践社会心理学研究,第 36 巻第 1 号,1996.
- [5] 檜村志郎.制度的談話.応用言語学事典(小池生夫編)[M].東京:研究社,2003.
- [6] 串田秀也・好井裕明.エスノメソドロジーを学ぶ人のために[M].京都:世界思想社,2010.
- [7] 鈴木聡志.会話分析・ディスコース分析[M].東京:新曜社,2007.
- [8] 泉子・K・メイナード会話分析[M].東京:くろしお出版,1993
- [9] 星野裕子.ラジオ相談番組における司会の役割と言語行動[J].人間文化論叢第 9 巻,2006:245-254
- [10] 好井裕明.制度的状況の会話分析.会話分析への招待(好井裕明・山田富

秋・西阪仰編) [M]. 京都: 世界思想社, 1999.

- [11] Bill Kovach & Tom Rosenstiel, *The Elements of Journalism* [M]: Peking University Press, 2011.
- [12] Clayman, S. & Heritage, J., *The News Interview: Journalists and Public Figures on the Air* [M]: Cambridge University Press, 2002.
- [13] Drew, P. & Heritage, J., *Talk at Work: Interaction in Institutional Settings* [M]: Cambridge University Press, 1992.
- [14] D. Cameron, 話し言葉の談話分析 [M], 林宅男 [訳] 東京: ひつじ書房, 2012.
- [15] Edmund Husserl, *Ideas: General Introduction to Pure Phenomenology* [M]: Routledge Press, 2012.
- [16] 刘运同, 会话分析概要 [M], 上海: 学林出版社, 2007.
- [17] 于国栋, 会话分析 [M], 上海: 上海外语教育出版社, 2008.
- [18] 赵刚・贾琦, 会话分析 [M], 北京: 高等教育出版社, 2013.
- [19] 赵刚, 公共机构性谈话的会话分析方法与课题 [J], 日语教育与日本学 (1), 2011: 65-70.

謝辞 本稿の作成中、同済大学宮山昌治先生から貴重なご意見、コメントをいただきました。ここに記して感謝の意を表します。

(九州大学比較社会文化学府 国際社会文化専攻)

(西安交通大学 教授)